様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年５月２８日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５２０２２１
研究課題名（和文）　ゲーリー・スナイダーの日本時代

研究課題名（英文）　Gary Snyder’s Japan Years

研究代表者
山里　勝己（YAMAZATO KATSUNORI）
国立大学法人 琉球大学・法文学部・教授
研究者番号：８０１０１４５０

研究成果の概要：

アメリカ現代詩人ゲーリー・スナイダー(Gary Snyder, 1930-)の日本時代（１８５６-６８）について、本人とのインタビューやその書簡の収集、日本時代の知人等とのインタビューや作品分析などを通して、新しい知見を得、その成果を報告書〔『評伝ゲーリー・スナイダーの日本時代』全３２９頁〕をまとめた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年	１，２００，０００	０	１，２００，０００
２００７年	１，０００，０００	３００，０００	１，３００，０００
２００８年	１，１００，０００	３３０，０００	１，４３０，０００
年度			
年度			
総　計	３，３００，０００	６３０，０００	３，９３０，０００

研究分野：アメリカ文学
科研費の分科・細目：英米・英語圏文学
キーワード：ゲーリー・スナイダー、日本時代、評伝

1. 研究開始当初の背景

アメリカ現代詩人ゲーリー・スナイダー（Gary Snyder 1930-）は、１９５６年に初来日し、１９６８年に帰国するまで京都を中心に日本で生活した。日本で生活したのは実質的には１０年間であったが、京都における仏教や能を中心とする日本文化及アジア文化の研究と詩の執筆は、帰国後のスナイダー

の詩人としての成長の基礎となった。また、スナイダーは、アメリカ思想史においては、現代環境思想のパイオニアとして高く評価される思想家であるが、その環境思想の生成に際して、京都時代の果たした役割は大きなものがある。それゆえ、この１２年間のその生活と思想は、このアメリカ現代詩を代表する詩人の軌跡を分析する上では極めて重要な時代であり、その全体像を把握するためにはその日本時代(Japan Years)は無視できないものとなっていた。

しかし、これまでのスナイダー研究は、その詩と散文の分析が中心となっていて、近年はその自然・環境思想の分析も重視されるようになってきた。同時に、詩人の年齢（現在７９歳）に鑑み、最近はその伝記を含めて、その全体像を把握しようとする動きが顕著になってきていた。年齢的にも、その証言を含めて評伝をまとめるには、いまがその最も適切な時期であり、そのためにも日本時代の綿密な検討が国際学界から要請されていた。

そのためには、１９５６年から１９６８年にいたる１２年間のスナイダーの詩と思想の発展を分析し、この詩人の日本時代の全体像を評伝(Critical Biography)として構築し、その全体像を理解するための新たな視点が必要とされていた。しかし、このような視点から書かれた評伝は皆無であり、またそのための十分な研究上の蓄積を有する研究者も存在していない状況であった。すなわち、本研究を遂行するためには、日本文化を十分に理解し、日本語を駆使して文献を分析する能力が必要であり、同時にスナイダーが日本からアメリアの同時代の詩人や作家たちに送った書簡を読み、詩人本人にインタビューを行うことが可能な研究者が必要とされていた。本研究者は、カリフォルニア大学デイヴィス校でスナイダーに関する博士論文を執筆し博士号を取得していたので、十分な研究推敲能力を備えていた。

書簡等の所在地はカリフォルニア大学やスタンフォード大学などであり、詩人からインタビューの許可はすでに得ていた。

このように、文書とオーラル・ヒストリーを交えながら、スナイダーの日本時代の全体像を明らかにすることが、スナイダー研究上避けては通れないものとなっていた。

２．研究の目的

上記１で述べた状況を踏まえて、スナイダーの日本時代の評伝を執筆することが本研究の目的であった。本研究は、特に日本時代という１２年間に明確に焦点を絞り研究を進めるもので、文化・文学・社会及び思想という総合的なアプローチをする点で過去に全く例のないものであった。特に、スナイダーの日本時代の研究には、日本文化、日本語、日本社会及びその日本時代の交友関係関係の理解と調査が不可欠なため、欧米の研究者にはきわめてむつかしい面があった。これはアメリカ文学に精通した日本人の研究者がきわめて独創的且つ強力に推進できる学術研究であり、斬新なスナイダー像を評伝として構築し、世界のスナイダー研究に対して日本からの貢献をすることが目的であった。

３．研究の方法

本研究は、平成 17 年 10 月１８年度から平成２０年度までの３年計画とし、次の３本柱で推進した。

スナイダーの「日本時代」に関する評伝を執筆するために、詩人とのインタビュー及び直接的な対話を含めて、アメリカにおける必要な資料の集中的な蒐集とこれまでの研究の批判的な検討を行う。

このために、カリフォルニア大学デイヴィス校のスナイダー・コレクションを中心として、スタンフォード大学やスナイダー自身のコレクションを調査し、新資料を発掘することをめざした。また、スナイダーとは３年連続してロング・インタビューを行い、かなり詳細な議論を通して、その日本時代の意義について討議を行った。

日本国内における資料収集、スナイダーの「日本時代」の主たる友人・知人に対するインタビューを行う。

京都時代（１９５６年〜６８年）は、スナイダーが多くの日本人と接触し、重要な体験をした時代であった。その中でも、特に親しく接触した友人たちにインタビューをし、同時にその作品等を収集し分析した。特に、山尾三省と中心とする「部族」と呼ばれる日本の対抗文化運動をになった詩人等とのインタビューや書簡及びその作品の分析を行った。

上記のプロセスを踏まえて、研究書誌の作成、学会・学術誌での研究成果の発表、研究成果報告書の作成を行う。

これについては、下記に記述しているように、学術論文等の学会や学術誌での発表を通して研究成果を公表し、成果を学界と共有した。

４．研究成果

平成１８年から２０年まで、毎年スナイダーにロング・インタビューを行い、同時に日本国内ではその知人たちにインタビューを行った。

また、スタンフォード大学やカリフォルニア大学などでその書簡を収集し、同時に本人の許可を得て京都時代の未刊の日記や写真を複写した。

これらの資料を詳細に分析し、従来の研究を厳密に検討し、新たなスナイダー像を構築した。特に、日本に出発する前後に関するスナイダー像、日本滞在中の初期のスナイダー像及びその日本（アジア）観、京都における１９６０年代の詩人としての成長、宮沢賢治との比較・検討、６８年のアメリカ帰国後に見られる日本及びアジアの影響、日本文化及びアジア文化研究や直接体験を基礎に深化されたその詩学や環境思想などをくわしく分析することで、従来にない知見が得られた。

これを報告書『評伝ゲーリー・スナイダーの日本時代』（全３２９頁）として英語でまとめた。これには巻末に文献目録とよるスナイダーとのインタビューを掲載した。

このように、本研究はスナイダーの日本時代の未公開の日記、書簡及び本人と関係者の証言を含め、まったく新しい資料や情報を基に進められたものであり、従来のスナイダー像を修正するとともに、新しい知見を豊富に提供することでスナイダー研究のみならずアメリカ詩（文学）に重要な貢献をする成果であると考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① Katsunori Yamazato: “Coming to Hawaii from the Remotest Corner of a Rising Empire:Some Okinawan Male Characters in Lucky Come Hawaii.” Proceedings for the International Conference:“Human Migration:Immigration, Language, and Literature.” (2009) 55-59. 査読有

② 山里勝己「惑星思考のアメリカ文学」『英語青年』１５４巻（２００８年)、３３-３５頁. 査読有

③ 山里勝己「森の生活―ソローとスナイダー」 『ヘンリー・ソロー研究論集』（日本ソロー学会）３４号（２００８年)、６３-７３頁。査読有

④ 山里勝己「アメリカン・サブライムとエコロジカル・サブライム――エマソン、ホイットマン、スナイダーの＜交感＞表象」『水声通信』２４号〔２００８年〕、６６-７５頁。査読有

〔学会発表〕（計５件）

① Katsunori Yamazato. “Coming to Hawaii from the Remotest Corner of a Rising Empire: Some Okinawan Male Characters in Lucky Come Hawaii.” Where is Okinawan Studies Headed? University of Hawaii Center for Okinawan Studies, March 19, 2009

② Katsunori Yamazato: “The Background and Some Problems Concerning the Establishment of the University of the Ryukyus.” アメリカ学会第４２回年次大会、同志社大学、２００８年5月31日

③ 山里勝己「惑星思考とゲーリー・スナイダーの『終わりなき山河』」（司会及び発表）日本アメリカ文学会全国大会シンポジウム「惑星思考のアメリカ文学」西南学院大学、２００８年１０月１２日

④ 山里勝己「環境文学とはなにか」（招聘講演）沖縄ロマン派学会、沖縄西部オリオンホテル、２００８年4月２０日

⑤ Katsunoi Yamazato: “Coming to Hawaii from the Remotest Corner of a Rising Empire:Some Okinawan Male Characters in Lucky Come Hawaii.” International Conference：” Human Migration: Immigration, Language, and Literature” 琉球大学２００８年11月30日.

〔図書〕（計３件）

① Katsunori Yamazato and Frank Stewart編 *Voices from Okinawa.* University of Hawaii Press、２００９年３月、全２１３頁。

② 生田、村上、結城、山里勝己（共著）『「場所」の詩学―環境文学とはなにか』 藤原書店、２００８年 全２９８頁（担当分：pp.160-213.「場所の詩学」（翻訳)、「場所をめぐる対話」（ゲーリー・スナイダー・山里勝己、翻訳も含めて)、「ゲーリー・スナイダーと東アジア――惑星の未来を幻視するために」担当）

③ 山里勝己他編『やわらかい南の学と思想』

沖縄タイムス社、２００８年

６．研究組織

(1)研究代表者

山里　勝己（YAMAZATO KATSINORI）

琉球大学・法文学部・教授

研究者番号：８０１０１４５０

(2)研究分担者

(3)連携研究者